

本調査は、中学校における英語教育の実態をとらえることを目的に実施している。中学校の英語教員を対象とした「教員調査」と、中学2年生を対象とした「生徒調査」の2つの調査で構成しており、中学校の英語教育について、教える側と学ぶ側の両面から分析できるように調査を設計した。

本調査の特徴は、以下のようにまとめられる。

1. 中学校における英語教育の実態と英語教員の意識を幅広くとらえることができる

授業での指導方法、教材、宿題といった基本的な実態をとらえるとともに、教員の自己研鑽や意識、教育観を把握することができる。また、小学校での英語教育（活動）の導入を背景に、小学校英語に対する中学校の英語教員の意識もとらえることができる。

2. 中学生の英語学習の実態と英語や外国に対する意識との関連をとらえることができる

学校や学校外での中学生の英語学習の実態や、英語や外国に対する意識を幅広く聞いている。実態と意識との関連をみることにより、生徒のタイプ別の現状と課題をとらえることができる。

3. 教える側と学ぶ側の両面から中学校の英語教育についてとらえることができる

「教員調査」と「生徒調査」との2つの調査で構成されていることにより、教える側と学ぶ側の両面から調査結果を分析することができる。中学校における英語教育をとらえるにあたり、多面的に分析することが可能である。

4. 「教員調査」と「生徒調査」の関連を考慮した調査設計をしている

本調査は、教える側と学ぶ側の両面から中学校における英語教育をとらえることを目的としているため、2つの調査を同年度に実施し、設計段階から分析に至るまで、相互に関連させて検討している。また、先に実施した「教員調査」の調査結果を参考にしながら、「生徒調査」の調査票を作成することができ、中学校における英語教育の実態により即した質問とすることができた。さらに、一部、教員と生徒の意識を比較できる質問もある。

【教員調査】

1. 調査テーマ

公立中学校における英語教育の実態と教員の意識

2. 調査方法

郵送法による質問紙調査

3. 調査時期

2008年7月～8月

4. 調査対象

全国の公立中学校の英語教員 3,643名

配布数 9,322通、回収率 39.1%

※全国の公立中学校の英語科の主任に回答を依頼した。

5. 地域によるサンプル数の内訳

北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州	無回答・不明
200	456	826	726	371	317	163	542	42

*「北海道」は北海道。「東北」は青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島。「関東」は埼玉、千葉、東京、神奈川、茨城、栃木、群馬。「中部」は新潟、富山、石川、福井、山梨、長野、岐阜、静岡、愛知、三重。「近畿」は滋賀、奈良、和歌山、京都、大阪、兵庫。「中国」は鳥取、島根、岡山、広島、山口。「四国」は徳島、香川、愛媛、高知。「九州」は福岡、佐賀、長崎、大分、熊本、宮崎、鹿児島、沖縄。

6. 調査項目

●指導と活動

指導形態／外国語指導助手（ALT）の授業参加頻度／外国語指導助手（ALT）の授業への関わり方／指導と活動の割合／4技能（読む、聞く、書く、話す）の割合／授業における指導方法／英語を使用する割合／指導する際に重要なこと・実行していること／教材／教科書の取り扱い／宿題／評価／生徒のつまずき

●教員の意識や自己研鑽

研修参加状況／役に立った研修／受けた研修／自己研鑽／悩み／英語科の教員として重要なこと／英語を指導する際に大切にしていること

●小学校英語について

小学校英語の経験がある生徒の割合／小学校英語との関わり／小学校英語の効果などに対する意見／小中連携について

【生徒調査】

1. 調査テーマ

中学生の英語学習の実態と、英語や外国に対する意識

2. 調査方法

学校通しの質問紙による自記式調査

3. 調査時期

2009年1月～2月

4. 調査対象

全国の中学2年生 2,967名（有効回答数）

5. サンプルの抽出方法

市区町村の人口規模および人口密度を考慮した有意抽出法

※調査対象者が生活する都市の規模によって回答に偏りが生じないようにするため、あらかじめ市区町村の人口規模と人口密度を考慮した3つの地域区分を設定し、調査地域が全国に散らばるようにサンプリングを行った。

※大都市（東京23区内）、中都市（地方中規模都市：人口規模が20～30万人程度）、郡部（町村部：人口規模が1～2万人程度）の3地域区分を設定。そのうえで、各地域区分に該当する市区町村の中から、ランダムに複数の市区町村を抽出。さらに、抽出した複数の市区町村から、ランダムに学校を抽出して調査を実施した。

※調査対象校は、大都市10校、中都市11校、郡部12校、合計33校である。

※地域別のサンプル数の内訳は、大都市891名、中都市989名、郡部559名である。

※調査はすべて公立校で実施した。

6. 調査項目

● 中学入学前の英語学習

小学校英語の経験の有無・頻度・開始学年／小学校英語に対する意識／中学入学前の学校外での英語学習の経験の有無・種類／中学入学前の英語学習の内容／中学入学前の英語学習に対する意識

● 中学校での英語学習

授業の理解度／英語の学習でわからないことがあったとき／指導と活動の割合／英語の得意・苦手／苦手と感じるようになった時期／もっともやる気が高かった時期／望ましい授業／英語の成績／つまずきやすいポイント／好きな教科

● 学校外での英語学習

学校外での勉強時間／学校外での英語学習の種類（習い事・家庭学習）

● 英語学習に対する意識について

4技能（読む、聞く、書く、話す）に対する意識／学習動機

● 英語や外国への意識

ふだんの英語との接触／将来身につけたい英語力／外国や英語に関する将来の意識／異文化への関心／外国や英語との関わり

1. 国私立調査（教員調査）

「教員調査」では、主な分析対象である全国の公立中学校の英語教員のほかに、国立中学校・私立中学校の英語教員を対象に同様の調査を同時に実施している（国私立調査）。本報告書では、その国私立調査の調査結果についても分析を行っている。

調査対象 国立・私立中学校の英語教員 302 名（国立 21 名、私立 279 名、無回答・不明 2 名）
配布数 752 通、回収率 40.2%

2. GTEC 調査（生徒調査）

「生徒調査」は、全国の公立中学校 33 校の中学 2 年生を対象に実施したが、そのうち 3 校には質問紙調査と同時に英語力テスト（「GTEC for STUDENTS」[※]）も実施している。本報告書では、質問紙調査と英語力テストの関連についても分析を行っている。

調査対象 生徒調査を実施した 33 校中 3 校（大都市、中都市、郡部各 1 校）の中学 2 年生（212 名）

※ GTEC for STUDENTS について（詳細⇒ <http://gtec.for-students.jp/>）

GTEC for STUDENTS とは、(株)ベネッセコーポレーションが開発したテストである。「読む・聞く・書く」の英語の 3 技能の運用力を絶対スコアで評価する。現実には起こりうる状況や場面において、実際に英語でコミュニケーションする力の習熟度を、絶対的な尺度で測定する。難易度は、Advanced、Basic、Core の 3 タイプがあり、本調査では中学 2 年生のレベルに合わせて Core タイプを使用した。

- ①本報告書では、調査対象である中学2年生を「中学生」と表記している。
- ②本報告書では、成績（自己評価）別の分析を行っている。
クラスの中での英語の成績について、「上の方」「真ん中より上」「真ん中くらい」「真ん中より下」「下の方」のいずれかから自己評価で回答してもらい、「上の方」「真ん中より上」を「上位層」、「真ん中くらい」を「中位層」、「真ん中より下」「下の方」を「下位層」と設定して分析に用いた。
- ③生徒調査の対象者が受けてきた小学校における英語教育（活動）と、2011年度から必修化される「外国語活動」とは異なるもののため、調査結果をみる際には留意されたい。

【参考】 小学校における英語教育（活動）をめぐる動き

年度	生徒調査の調査対象者の学年	小学校
2002	小2生	現行の「学習指導要領」完全施行
2003	小3生	
2004	小4生	「総合的な学習の時間」の中の国際理解に関する学習の一環として英語活動が始まる
2005	小5生	
2006	小6生	
2007	中1生	
2008	中2生	新「学習指導要領」告示（3月）
2009	中3生	移行措置期間
2010		
2011		新「学習指導要領」完全施行
2012		
2013		「外国語活動」 小5生・小6生／授業時間数年間35時間

*小学校での「外国語活動」は、2011年度から必修化される。小学校5・6年生に週1回導入され、「英語ノート」という共通教材が用意されている。本調査の対象者が小学校で経験した英語教育（活動）は、「総合的な学習の時間」の「国際理解教育」の一環としての英語教育（活動）である場合が多い。また、その内容や時数は地域・学校により異なる。

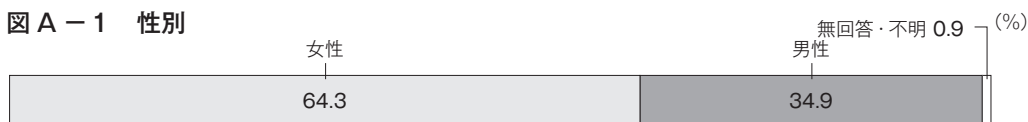
- ④本文中の百分比（％）は、有効回答数のうち、その設問に該当する回答者を母数として算出し、少数第2位を四捨五入して表示した。四捨五入の結果、数値の和が100にならない場合がある。

A. 教員調査

1. 属性

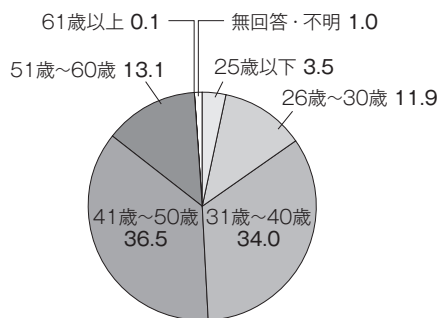
- ◆回答者の性別は、「女性」が64.3%、「男性」が34.9%と女性が多い（図A-1）。
- ◆回答者の満年齢は、「41～50歳」が36.5%、「31～40歳」が34.0%と30代、40代が大部分を占めている（図A-2）。
- ◆教職経験年数は、「11～20年目」が36.3%ともっとも多く、次いで「21～30年目」が30.3%である（図A-3）。
- ◆全校生徒数は、「100人以下」が19.2%、「101～200人」が16.5%と比較的多い。（表A-1）。
- ◆英語の年間授業時数は、3学年とも105時間（週3単位）が7割以上と多いが、学年が上がるにつれて140時間（週4単位）も若干増加する（表A-2）。

図A-1 性別



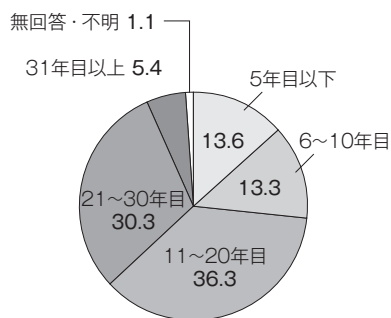
図A-2 満年齢

(%)



図A-3 教職経験年数

(%)



表A-1 全校生徒数

(%)

100人以下	101～200人	201～300人	301～400人	401～500人	501～600人	601～700人	701人以上	無回答・不明
19.2	16.5	14.7	15.6	12.3	8.6	6.9	5.0	1.2

表A-2 英語の年間授業時数

(%)

	1年生	2年生	3年生
105時間（週3単位）	78.8	76.1	71.4
140時間（週4単位）	7.5	10.0	14.1
175時間（週5単位）	0.2	0.2	0.3
210時間（週6単位）	0.1	0.1	0.0
245時間（週7単位）	0.0	0.0	0.0

* 1クラス当たりの英語の実授業時数（学校裁量などの時間を含め、平成20年度に予定している時間数）についてたずねた。

* 回答（自由記述）のなかから上記の時間数のみ抜粋した。

* 学習指導要領が定める英語の年間授業時数は、105時間（週3コマ）である（2009年12月時点）。

2. 調査からわかる中学校教員（英語科）の指導体制

- ◆ 回答者の学級担任の有無は、「担任をしている」が61.5%と6割以上を占め、一方で「担任や副担任はしていない」は9.1%にとどまった。また、年齢別の傾向をみると、40歳以下の教員（「30歳以下」+「31～40歳」）の7割は「担任をしている」が、41歳以上（「41～50歳」+「51歳以上」）は「担任をしている」割合は50%台以下となる（表A-3）。
- ◆ 回答者が担当している学年は、1年生から3年生までそれぞれ6割以上を占めている（図表省略）。さらに、担当している学年数はそれぞれ3割台である。また、学校の規模（全校生徒数）別では、小規模校ほど担当している学年数が多く、大規模校ほど少ない（表A-4）。
- ◆ 1校当たりの教諭の人数は2.6人である。学校の規模（全校生徒数）別では、規模が大きくなるほど1校当たりの教諭の人数は多い（表A-5）。

表A-3 学級担任の有無（全体・年齢別） (%)

	全体	年齢別			
		30歳以下	31～40歳	41～50歳	51歳以上
	3,643名	560名	1,238名	1,331名	478名
担任をしている	61.5	70.7	72.6	57.7	35.6
副担任をしている	28.6	27.3	25.2	26.8	44.8
担任や副担任はしていない	9.1	1.8	2.2	15.3	19.0
無回答・不明	0.8	0.2	0.0	0.2	0.6

* 「30歳以下」は「25歳以下」「26～30歳」の合計。「51歳以上」は「51～60歳」「61歳以上」の合計。

表A-4 英語の授業を担当している学年の数（全体、全校生徒数別） (%)

	全体	100人以下	101～200人	201～300人	301～400人	401～500人	501～600人	601～700人	701人以上
		3,643名	700名	601名	536名	567名	449名	313名	253名
1学年	33.8	5.1	13.6	20.0	43.0	57.5	67.7	64.4	68.1
2学年	34.7	5.6	43.1	60.3	46.6	33.6	25.6	34.0	29.1
全学年	30.8	89.1	43.1	19.4	10.4	8.9	6.7	1.6	2.7
無回答・不明	0.7	0.1	0.2	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

* 担当している学年についての回答より算出。

表A-5 1校当たりの英語科教員の平均人数（全体、全校生徒数別） (人)

		教諭	常勤講師	非常勤講師	ALT	地域人材	その他
		3,538名	1,643名	1,303名	1,151名	795名	781名
全体		2.6	0.8	0.6	0.6	0.1	0.3
全校生徒数	100人以下	1.1	0.4	0.1	0.5	0.0	0.2
	101～200人	1.8	0.7	0.5	0.5	0.1	0.3
	201～300人	2.2	0.7	0.6	0.6	0.1	0.2
	301～400人	2.8	0.9	0.7	0.6	0.1	0.4
	401～500人	3.3	0.9	0.6	0.5	0.1	0.3
	501～600人	3.7	0.9	0.8	0.6	0.1	0.3
	601～700人	4.1	1.3	0.9	0.7	0.1	0.3
	701人以上	5.3	1.2	1.0	0.6	0.1	0.3

* 「0」以上の回答（自由記述）があったものをもとに平均人数を求めた。

B. 生徒調査

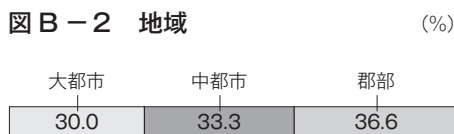
1. 属性

- ◆回答者の性別は、「男子」が53.1%、「女子」が46.6%と若干男子のほうが多い（図B-1）。
- ◆回答者の地域別の構成比は、「大都市」30.0%、「中都市」33.3%、「郡部」36.6%で、若干「郡部」が多い（図B-2）。
- ◆小学校英語の経験については、91.4%が「あった」と回答しており、9割以上の生徒が小学生のときに何らかの英語教育（活動）を経験している（図B-3）。
- ◆小学校英語の頻度をみると、全体では「週に1回くらい」が23.2%と最も多い。地域別にみると、「大都市」では「週に1回くらい」36.1%、「中都市」では「年に2～3回くらい」27.5%、「郡部」では「月に1回くらい」24.8%が、それぞれ最も多い（図B-4）。
- ◆小学校英語の開始学年にはバラつきがみられるが、「わからない」という回答が35.5%と最も多い（図B-5）。

図B-1 性別



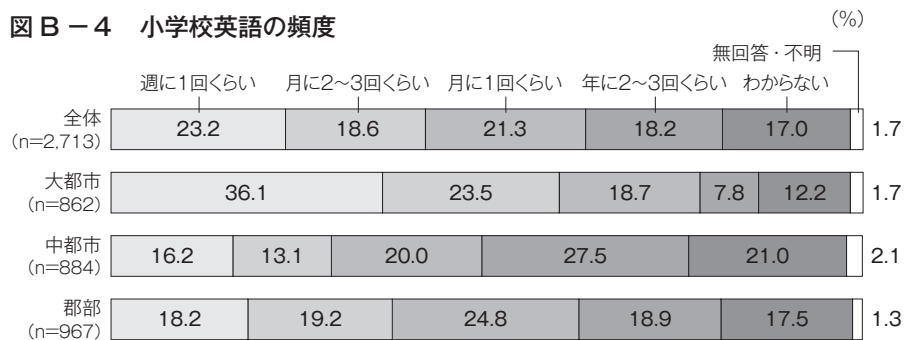
図B-2 地域



図B-3 小学校英語の経験の有無



図B-4 小学校英語の頻度



* 小学校英語の経験の有無について「あった」と回答した人のみ対象。

図B-5 小学校英語の開始学年



* 小学校英語の経験の有無について「あった」と回答した人のみ対象。

2. 調査対象校のプロフィール（「学校調査」の回答より）

生徒調査では、調査対象校の特性を把握するため、調査対象校（33校）の英語教員に対し、各校の英語教育の実施状況や小中連携の様子に関する調査を実施した。ただし、これは生徒調査の対象校のみの結果であり、全国的な傾向を示すものではない。

- ◆調査対象校の地域別の学校数は、「大都市」10校、「中都市」11校、「郡部」12校である（表B-1）。
- ◆英語の年間授業時数をみると、ほとんどの学校が105時間（週3コマ）であるが、一部、140時間の学校もあり、3年生は7校ととくに多い（表B-2）。
- ◆外国語指導助手（ALT）が1クラス当たりどのくらいの頻度で授業に参加しているかをみると、「週1回以上」「週1回程度」が多い（表B-3）。
- ◆調査対象校とその校区の小学校との英語活動（教育）に関する連携の様子については、「まだそれほど連携していない」が14校ともっとも多く、次いで「中学校の教員が小学校の英語活動を見学する」が11校である（表B-4）。

表 B-1 地域

大都市	10校
中都市	11校
郡部	12校

表 B-2 英語の年間授業時数

	105時間	140時間	その他	無回答・不明
1年生	25校	4校	2校	2校
2年生	23校	4校	4校	2校
3年生	21校	7校	3校	2校

* 1クラス当たりの英語の実授業時数（学校裁量などの時間を含め、平成20年度に予定している時間数）についてたずねた。

* 回答（自由記述）のなかから上記の時間数のみ抜粋した。

* 学習指導要領が定める英語の年間授業時数は、105時間（週3コマ）である（2009年12月時点）。

表 B-3 外国語指導助手（ALT）の授業への参加頻度

週1回以上	6校
週1回程度	13校
月2、3回程度	4校
月1回程度	4校
2、3か月に1回程度	1校
半年に1回程度	1校
年に1回程度	1校
来ていない	0校
無回答・不明	3校

表 B-4 小中連携の様子

まだそれほど連携していない	14校
中学校の教員が小学校の英語活動を見学する	11校
小学校の先生が中学校に見学に来る	9校
小中学校の教員が集まり勉強会を行う	8校
小学校の教員が中学校で、中学校の教員が小学校で英語の授業をすることがある	6校
小学校に合わせて英語の指導や導入を変えている	2校

* 複数回答。

教員調査

(1) 指導の実態

■英語の使用割合・指導と活動の割合

ふだんの授業で、半分以上英語を使用している教員は5割以上だった。また、授業中に生徒が活動する時間のほうが多い「活動型」は26.5%、教員が説明する時間のほうが多い「指導型」は51.8%と「指導型」のほうが多い。 [6]

* 授業で、生徒が説明している時間と生徒が活動している時間の割合について、「10対0」～「6対4」と回答した人を「指導型」、「1対9」～「4対6」と回答した人を「活動型」とした（「5対5」の「指導=活動」を省略）。

■外国語指導助手（ALT）について

外国語指導助手（ALT）の1クラス当たりの授業参加頻度は、「週1回以上」18.0%、「週1回程度」29.2%、「月2、3回程度」24.4%、「月1回程度」15.9%だった。ALTの授業への関わり方は、「主に教員が主導で授業を行い、限られた活動のみ関わる」が43.2%と最も多く、次いで「教員とほぼ半分以上ずつに分担する」が36.3%である。 [5]

■指導方法

授業中の指導方法では、「音読」「文法の説明」「発音練習」「前回の授業の復習」「文法の練習問題」「ペアワーク」を「行う（よく+ときどき）」という回答がいずれも9割以上と多い。また、指導のタイプ別にみると、「活動型」の教員は、「スピーチ・プレゼンテーション」「グループワーク」「英作文」「教師による small talk（英語での簡単な雑談）」などを行う比率が高く、「指導型」の教員との指導方法の違いがみられる。 [6]

■指導で重要だと思うこと・実行していること

「基礎的な内容は定着するように反復練習を行う」を「とても重要」（89.7%）、「十分実行している」（59.2%）という回答が最も多い。「生徒が自分の考えを英語で表現する機会を作る」「生徒の興味や関心の対象となる日常的で身近な話題を取り上げる」「外国や異文化に対する興味を高める」などは、重要だと思いつつも実行できていないことようだ。 [7]

■教材

授業のなかで使う教材で、「使う（よく+ときどき）」割合が9割以上と多かったのは「CDやテープなどの音声教材」「自作プリント」、次いで、「教科書準拠のワークブック」が7割程度である。指導のタイプ別にみると、「指導型」では「教科書準拠のワークブック」「教科書準拠のプリントやワークシート」「市販のプリントや参考書やワークブックなど」が多く、「活動型」では「辞書（生徒に使わせる）」が多い。 [8]

■宿題の出し方と内容

宿題を「授業のたびに出す」教員が54.6%と過半数を占めた。また、平均的な生徒にとってどれくらいの時間を要する宿題を出しているのかは、「20分くらい」「30分くらい」が合わせて77.7%だった。また、宿題の内容については、予習として出す宿題は「新出単語の意味調べ」77.5%や「教科書本文の書き写し」63.9%、復習として出す宿題は「文法ドリル（ワークブックやワークシート）」83.9%や「単語練習」72.6%が多い。 [10]

■評価

通信簿をつけるときに「とても重視する」のは、「定期試験」が84.8%と最も多く、「宿題や提出物の状況」は54.2%、「授業中の態度」が50.2%と続く。 [11]

(2) 指導に関する教員の意識

■生徒のつまずき

生徒の英語学習のつまずきの主な原因は、「単語（発音・綴り・意味）を覚えるのが苦手」「英語に限らず、学習習慣がついていない」「英語に限らず、学習自体への意欲が低い」ととらえており、いずれも「とてもあてはまる」が6割以上と高い。 [19]

■悩み

「生徒に学習習慣が身についていない」「授業準備の時間が十分にとれない」で「そう思う（とても+まあ）」との回答がいずれも80.7%ともっとも高く、「生徒間の学力差が大きくて授業がしにくい」76.1%がこれに続く。 [20]

■研修・自己研鑽

受けたと思っている研修は、教職経験年数にかかわらず「具体的な指導法や教材研究などの実践的な研修」が6割ともっとも高い。また、教職経験年数が多くなるほど、「自分自身の英語力を高める研修」を受けたいと考える割合が多くなる。 [13]

■英語科の教員として重要なこと

もっとも高かったのは「教科指導力」90.0%、次いで「授業を運営する力」74.8%だった。いずれも年齢の高い教員のほうが重要だと思う比率がやや高い。一方で、「英語の授業以外の場面での教員と生徒の関係性」について重要だと思う比率は、年齢が低い教員のほうが高い。 [21]

■英語の指導で大切にしていること

「生徒が英語を好きになるように指導する」(41.2%)がもっとも高く、次いで「高等学校やその後の生涯にわたる英語学習の基礎を培う」(24.8%)が続く（単一回答）。 [22]

(3) 小学校英語との関わり

■校区内の小学校英語との関わり

「小学校の英語教育（活動）について知っている」に「あてはまる（とても+まあ）」と回答したのは48.5%と半数以下だった。また、「小学校で授業をすることがある」や「中学校での英語の授業の導入ややり方を小学校に合わせて変えている」について、「あてはまる（とても+まあ）」という回答はいずれも1割台だった。 [16]

■小学校英語についての考え

小学校における英語教育（活動）についての考えをたずねたところ、「英語を聞くことに慣れる」「外国や異文化に対する興味が高まる」「英語に対する抵抗感がなくなる」「英語を聞く力が高まる」については7割以上が肯定している（「そう思う（とても+まあ）」、以下同）。 [17]

生徒調査

(1) 中学入学前の英語学習

■小学校英語に対する意識

「内容が簡単だった」「楽しかった」(「そう(とても+まあ)」、以下同)が7割を超える。また、「外国や英語に興味をもった」は4割である。 [2]

■中学入学前の学校外での英語学習

約4割の生徒が、中学入学前(小学生の時やそれ以前)に学校の授業以外で英語や英会話の勉強をした経験がある。地域によって違いがみられ、大都市に多い。 [3]

■中学入学前の英語学習の内容と英語に対する意識

中学入学前に小学校や習い事で行っていた英語学習の内容は、「英語を聞くことや話すこと」「アルファベットの読み書き」が6割を超えている。

また、中学入学前の英語の学習や英語に対する気持ちは、「好き」と「嫌い」が拮抗している(「好き(好き+どちらかといえば好き)」45.0%>「嫌い(どちらかといえば嫌い+嫌い)」42.9%)。また、中学校で英語を学ぶことが楽しかったかどうかは、「楽しみではなかった」が「楽しかった」を11.1ポイント上回っている。「楽しかった(とても+まあ)」41.9%<「楽しみではなかった(あまり+まったく)」53.0%。 [4] [5]

(2) 中学校での英語学習

■英語の授業の理解度

「ほとんどわかっている」と「70%くらいわかっている」を合わせて4割だった。また、英語の学習でわからないことがあったときにどうするかをたずねたところ、「友だちに聞く」が6割台ともっとも高かった。 [6] [16]

■英語の得意・苦手と英語を苦手になった時期

英語を「得意(とても+やや)」、以下同)な生徒は37.5%、一方で「苦手(とても+やや)」、以下同)と感じている生徒は61.8%と「得意」を大きく上回る。また、「苦手」と回答した生徒のうち、苦手と感じるようになった時期は「中1の後半」がもっとも多く、中学1年生のうち(「中1の始め頃」～「中1の後半」の合計)におよそ7割が苦手意識を持つようだ。 [7]

■英語学習のやる気

英語学習のやる気をもっとも高かった時期は、「中1の始め頃」で43.6%だった。また、好きな教科について複数回答でたずねたところ、「英語」を好きという生徒は25.5%と「国語」に次いで2番目に低い。 [8] [25]

* 英語に対する認識の4タイプ

本調査の分析においては、英語の「得意(とても+やや)」「苦手(やや+とても)」、「好き」「嫌い」*をもとに英語に対する認識の4タイプを作成した。

「得意・好き」(21.2%) 英語が得意で好き
 「得意・嫌い」(16.3%) 英語は得意だが嫌い
 「苦手・好き」(4.1%) 英語は苦手だが好き
 「苦手・嫌い」(57.7%) 英語は苦手で嫌い

*「あなたは、どの教科が好きですか」という質問で、「英語」を選択した場合を「好き」、選択しなかった場合を「嫌い」としている。「嫌い」と回答しているわけではないが、ここではわかりやすさを考慮して、「嫌い」と表記している。

(3) 学校外での英語学習

■学校外での英語学習時間

学校外での英語の平均学習時間は32.0分、全体の約4分の1が「ほとんどしない」と回答している。[11]

■学校外での英語学習状況

学校外での英語学習については、4割以上が「学習塾で英語を習っている」と回答している(複数回答)。また、家での英語学習は「学校の勉強(宿題、予習・復習など)」が7割を超えている(複数回答)。

[12] [13]

(4) 英語学習に対する意識

■4技能の活動について

4技能(読む、聞く、書く、話す)の好き・嫌いをそれぞれたずねたところ、「英語を聞くこと」「英語を話すこと」「英語を書くこと」を「好き(とても+まあ、以下同)」という回答はいずれも4割台であるが、「英語で文章や本を読むこと」を「好き」は3割台と4技能中でもっとも低い。[14]

■つまずきやすいポイント

「文法が難しい」「英語のテストで思うような点数がとれない」「英語の文を書くのが難しい」「あてはまる(とても+まあ)」と感じている生徒がいずれも7割以上と多い。[15]

■英語の学習動機

英語の学習動機については、約8割が「中学生のうち勉強しないといけないから」「英語のテストでいい点を取りたいから」「あてはまる(とても+まあ)、以下同」と回答しており、次いで、「できるだけ良い高校や大学に入りたいから」が7割強で続く。[17]

■どんな英語の授業を受けたいか

生徒が受けたいと思っている英語の授業は、「入試に役立つ授業」が38.9%ともっとも高く、次いで「英語が好きになる授業」が31.3%である。[9]

(5) 外国や英語への興味・関心

■異文化への関心

「外国に行きたい」「そう(とても+まあ)、以下同」という回答が64.7%、「外国の人に道を聞かれたら答えるようにしたい」が59.6%であった。[20]

■外国や英語との関わり

日常生活における外国や英語との関わりについては、約7割が「外国のおみやげをもらったことがある」と回答している。地域別に違いがみられ、「家族に英語を話せる人がいる」「外国に住んでいる(または住んでいたことがある)家族や親せき、友だちがいる」「外国人の友だちがいる」などで中都市・郡部に比べて大都市のほうが割合が多い。[18]

■ふだんの生活で英語に触れること

「歌詞を見ながら英語の歌を聴く」「英語音声の映画やビデオ・DVDを(日本語吹き替えではなく)日本語字幕で見ると」「ある(よく+ときどき)、以下同」などは4割台で高かったが、「学校の授業以外で、外国の人と英語で話す」は12.1%と低い。[19]

■英語についての将来の意識

71.1%の生徒が「自分たちが大人になる頃には、今よりも英語を話す必要がある社会になっている」「そう思う(とても+まあ)、以下同」と感じており、「英語が話せなくても、将来、困ることはない」は35.0%にとどまった。

また、将来身につけたい英語力については、「英語でよい成績がとれるくらいの英語力」が27.5%ともっとも高い。[21] [22]